

## パリを中心としたフランス19世紀装飾壁画の实地調査

鈴木俊晴

美学美術史学専門 前期課程1年

### 研究概要

私は修士課程でフランスの19世紀の画家ピエール・カミーユ・ピュヴィ・ド・シャヴァンヌ（1824-1898）を研究の対象としている。彼は一般的なカンヴァス画にも多くの傑作を残しているが、その主たる活躍の場は美術館や神殿などの公共建築物のなかの壁画であり、その点が19世紀の数多の巨匠たちと決定的に異なっているところである。今日19世紀のフランス美術と言えば、ロマン主義や印象派の時代がすぐに思い出される。その反面、特にパリを中心として、多くの壁画が描かれ、また壁画についての議論が活発であったことなどは見過ごされがちである。しかし、彼らこそが、多くの人の目に触れることとなる公共の場で19世紀のフランス人の集合的な夢とでも言うべきものを描いていたのである。そのようなこれまであまり日の目を見ることのなかった画家たちに注目することで、19世紀フランスの美術史を問い直すのが私の研究の大きな目的である。

### イニシアティブのプロジェクトでやろうとしていること/フィールドワーク @パリ

#### 作品の調査

美術作品はその本性からしてそうであるが、特に壁画は、それが飾る建築物を考慮に入れて描かれていることが多いため、なおさら实地で見てみる事が大切になる。また、上述したように、それほど研究の進んでいる領域ではないので、現在手に入る図版も限られているため、作品の写真撮影もしなくてはならない。そのために、まず以下の基準で訪れるべき場所をリストアップした。ここでの公共建築物とは、美術館、教会、神殿、役所などのモニュメンタルな建物のことである。

- 1) ピュヴィ・ド・シャヴァンヌの作品のある公共建築物  
パンテオン、パリ市庁舎、オルセー美術館、ルーアン美術館、アミアン美術館など
- 2) 19世紀に装飾の加えられた公共建築物

サン・ジェルマン・ロセロワ教会、サン・シュルピス教会、サン・セヴラン教会、ノートルダム・デ・ロレット教会、サン・ジェルマン・デ・プレ教会、ブルボン宮、リュクサンブール宮など

3) 1と2にかかわる作品を所蔵する美術館  
ルーヴル美術館、プティ・パレ美術館、ギュスターヴ・モロー美術館、ドラクロア美術館など

以上の場所で作品の調査および写真撮影を行う。壁画については、美術作品の調査で一般的ないくつかの項目（タイトル、主題、制作年、状態などなど。詳しくは別紙参照）を調べるのはもちろんであるが、技法の検討（油彩、油彩とロウ、フレスコなどなど）やそれが装飾する建物との関連なども総合的に調査を行う予定である。

#### 文献の調査

西欧の19世紀は、新聞の出現とその急速な広まりが示すように、出版革命の時代であった。それが当時の美術に与えた影響は決して少なくない。毎年恒例のサロンの時期が来ると、各新聞はこぞって特集を組み、サロン評を連日掲載した。特に人気を集めたものはまとめられ1冊の本として出版されることもあった。また、そこで名前を売り、小説家や詩人へと転身した文学者も多かった。美術理論家としても優れていたドラクロアは、いくつかの論考を新聞で発表している。このように、19世紀の美術と当時の文字情報媒体とは切っても切れない関係にある。しかしながら、これらの文献のうちの多くは日本では読むことができないのが実情である。そのため、これまでの研究で以下の方針で作成してきたビブリオグラフィーをもとに、特にフランス国立図書館で資料の閲覧および複写をする予定である。

- 1) ピュヴィ・ド・シャヴァンヌについての文献、特に彼の《貧しき漁夫》についての文献
- 2) 19世紀の壁画についてのさまざまな言説についての文献
- 3) ジャン・フランソワ・ミレーについての文献
- 4) カミーユ・コローについての文献

## フィールドワークで期待できる成果

以上の調査を通して、まずはじめに期待できるのが、パリを中心とした19世紀の壁画／装飾画についての包括的な資料が作成できることである。これまで、教会や役所などの分野別の資料は散見できるものの、「壁画」というタームでまとめたものは未だつられていない。作品の質（つまり、傑作であるかどうか）の問題はおくとして、19世紀に描かれた壁画をまとめた資料ができれば、これまでの美術史ではこぼれ落ちていた多くの作品を取り上げることができ、そうすることでようやく、私の中心的な研究対象であるピュヴィ・ド・シャヴァンヌの作品の本格的な検討に入れることができる。特に私に関心を持っているピュヴ

ィのイメージの着想源の問題は、この資料作成の作業を経なければ画竜点睛を欠いたものになってしまうであろう。

文献の調査では、フィールドワークの限られた時間のなかでどれだけ多くを複写できるか、が目的であるため、その個々の検討は帰国してからになる。しかし、上述したようにこれらの資料は日本国内ではほとんど手に入らないものであるため、今後の研究の基盤となり、それを飛躍させるようなものになるであろう。

このように、今回のフランスでのフィールドワークは、私の大学院の研究において基盤となるものである。十分な成果があがることを、個人的にも期待している。

# 日本在住外国人の相互扶助と日本人との共生に関する都市人類学的研究

森田 剛光

文化人類学・宗教学・日本思想史専門 後期課程1年

## 研究計画の概要

和崎春日教授は、日本人と在住外国人との異文化コミュニケーションを促進させ、また多文化社会のもとでの共生に向け、その方向性を探るべくフィールドワーク、研究プロジェクトを組織してきた。従来在住アフリカ人が中心であったが、ネパールを加え、比較文化研究としても問題提起が可能であると考えられる。上記の研究計画の概要に沿い、まず、在住ネパール人の社会、コミュニティなどの基礎的調査を行ってきた。

以下簡単であるがネパールの人々の状況についてまとめる。

## ネパール社会の構造

ネパールは、多くのエスニック・グループ、カースト、言語、宗教的コミュニティから構成される文化的に多様な国家である。ネパールには60のカースト・エスニック集団と70の言語と方言が存在するといわれ、その様態はトニー・ハーゲンの「アジアの民族博覧会場」[Hagen 1980: 91] という言葉で語られるほどである。ネパールの文化的多様性は、度重なる人口

移動の結果であり、人々の居住地は、高地、中間山地、平野部と大別できる。チベット・ビルマ語を話すエスニック集団、たとえば、グルン、タマン、リンブといった人々は北と東からヒマラヤを越えて移住したといわれ、ネパール語を話すパルパテ、つまりバフン、チェトリ、タクリは西と南から移住した。エスニック集団のネワールは、2000年にわたってカトマンドゥ盆地に移住してきたいくつかのコミュニティにより混成されている。タライ平原には、先住の人々、タルー、サタール、サンタルの森林居住民と、後にタライにやってきた農耕のマイティリ語を話す人々などが暮らしている。言語集団分布は、山岳部を中心に居住していたチベット・ビルマ語族とインド・タライ平原部から進出してきたインド・ヨーロッパ語族が丘陵地帯で拮抗しているが、実際にははっきりと区分できるわけではなく混じり合い複雑な民族構成と分布をしている。人種的には、チベット・ビルマ語族は、モンゴロイド系、インド・ヨーロッパ語族は、アーリア系コーカソイドである。丘陵部に住むネパール語を母語とする人々は、「パルパティ（山地の）ヒンズー」(Parbath hindu) と呼ばれ、ヒンズー教に基づくカースト集団を構成している。このカースト集団の中に、